

7 領聖後の感謝の祈禱 (続き)

主イイスス・ハリストス我等の神や、願くは爾の聖體は、我が爲に永生となり、爾の尊血は、罪の赦とならん。願くは此の感謝の祭は、我が爲に喜悦と壯健と安樂とならん。又畏るべき爾が再度の降臨の時、我罪人に、爾が光榮の右に立つを得せしめ給え。爾が至淨の母と諸聖人との祈禱に依りてなり。

主宰よ、今爾の言に循いて、爾の僕を釋し、安然として逝かしむ。蓋我が目は爾の救を見たり、爾が萬民の爲に備えし者なり、是れ異邦人を照す光、及び爾の民イズライリの榮なり。(ルカ福音書 2 章 19 (32 節))

(内田神父付記)

「期は満ち、神の国は近づけり。痛悔して福音を信ぜよ。(マルコ福音書 1 章 15 節)」と述べ、宣教活動を始めました。信仰は痛悔、「神の恩に感謝せず自分のことばかり考える生き方、人を羨み不平不満ばかりの生き方を改めること」「全ての人を愛する神を、自分も愛すること」「神が愛する全ての人を、自分も愛すること」から始まります。

この世界は本来、全ての人が十分な恵みを得ることができ、

それゆえ飢餓や争いなどあり得ないものとして神が創造されました。しかし、人は自分に与えられた恵みに満足せず、感謝せず、他の人の恵みを際限なく奪いあいます。或る人にどれほどの能力があるかと、それは神に与えられたものです。何であれ自分が努力して得たと思う物も、神に与えられた生命あつてのもです。人が生きるに必要な糧以上の物を正当な報酬だと思ふのは、本当は思い上がりなのです。

人間が変えてしまったこの世の中は、他の人のことを慮るゆとりが少ないのは確かです。少ない年金から多くのものが引かれていきます。汚染された危険な食品が出る度の大騒ぎのわりには、真面目に頑張っている農家や漁業者、養殖業者など大切にされていません。わずかに残る生活費で買える格安品は外国で不当に安い賃金で生産製造されたものだと思えば、全ての人と分かち合つて生きるとはなんと難しいことでしょう。多くの人々が「勝ち組」を目指す濁流に私たちも呑み込まれ、知らず知らず加担してしまっています。「隣人のものを欲してはならない」という神の教えは思い起こされることなく、もはや罪とは意識されていないのが現状です。

痛悔は私たちの心を照らし、これまで意識していなかった罪をも自覚させます。しかしそれは私たちを罰するためではなく、私たちが全ての人を愛し分かち合う能力を目覚めさせ、永遠の生命と喜びを「御聖体」として全ての人(異邦人||自分がまだ知らない人々、及びイズライリの民||私たちの身近な人々)と分かち合うためです。

今回で「少年・少女のための痛悔の手引き」は最終回です。コルニリイ西海枝神父様に感謝し、永遠の記憶をお祈り申し上げます。